Friedrich Hayek

(1999-1992)

1. 講義のポイント

- 貨幣制度についてのハイエクの議論を理解しよう。
- 進化する社会という概念を，自生的秩序論の文脈で理解しよう。
- なぜ,「自由」とは何かを理解し，21 世紀の世界での自分たちの生き様を考えてみよう。

2. ハイエクの生きた時代

(1)19 世紀末のウィーンの混沌とした文化の中に生まれる(1899 年)。

[1]世紀末ウィーンの3つの科学的業績

マッハやボルツマンといった物理学者による力学系にかんする先駆的業績

→アインシュタインの相対性理論に影響を与える。

[2]メンガーらによるオーストリア経済学派の形成

→人間の主観にかんする理論の形成

[3]フロイトらによる精神分析学（心理学）の誕生

→人間の精神に対する観察

ハイエクの思想や社会理論の基礎に影響を与えている。

(2)第一次大戦に出征するも敗戦，ハプスブルグ朝オーストリア帝国崩壊(1919-1923 年)。

→ファシズムと社会主義の台頭(1932-1945 年)

- 敗戦により，ハプスブルク朝オーストリア-ハンガリー帝国は消滅する。

  →世界の中心はイギリスからアメリカへ

- 経済的問題と国民のプライドの喪失

  →反動としての民族主義＝オーストリア・ファシズム

1932 年，ドイツと関税同盟を組むことによって共同して経済危機に当たろうとするも，戦勝国によって阻止されてしまう。

- ナチス(国家社会主義ドイツ労働者党)の台頭

  ＝中産商工業者を地盤として台頭する。

クーデターを起こし政権の転覆を試みたが失敗，ヒットラーは捉えられ投獄される。その後，活動を再開し 1933 年に政権を簒奪。ワイマール憲法で規定された基本的人権をほとんど停止し，1934 年にはヒットラーが総統（大統領兼首相）の座に就く。

ナチスが受け入れられた背景

- 第一次大戦敗戦によって大きく傷つけられたプライド
- 多額の賠償金と産業の崩壊，さらにハイパーインフレーションによる金融システムの崩壊等により，国内は深刻な不況にさらされていた
- 押しつけられた憲法→もっとも民主的といわれたが，自ら望んで作られたものではなかった

(3)第二次大戦後のケインズ主義と社会主義の隆盛(1945-1978 年)。

1922 年　ソビエト連邦成立

1949 年　東ドイツ，中華人民共和国成立。

資本主義社会の問題点を解決する希望の国家として喧伝された。一方で，スターリンら党首脳による政敵への激しい弾圧により，数百万単位の人々が粛正された。

- ✓ ファシズム政権の成立
- ✓ 第１次大戦以降の深刻な長期不況
- ✓ 国際秩序の主導権を握る国家の不在
- ✓ 国際連盟の無力
- ✓ 危機克服のための手法の欠如
- ✓ 国家による経済管理
- ✓ 国内の民族的団結
- ✓ 経済圏のブロック化

自国利益優先の経済システムの成立

『隷属への道』(1944 年)

ドイツやイタリアそしてロシアが歩んだ道は，ヨーロッパ社会が歩みつつある道でもある。われわれは市場の中での競争を通じて，成功してきた。しかし，われわれの多くは成功の後，なぜ自分たちが成功したのかということを忘れてしまった。われわれは，より安全にさらなる成功を得ようとした結果，国家にわれわれの自由を売り渡してしまった。

全体主義の台頭は，そもそも経済問題から発している。経済的自由を売り渡してしまうことは，政治的自由も失うことになる。不況期に政府の市場への介入を認めるとそれは干渉の範囲を広げ，最後には私的所有権まで侵すことになる。ひとたびそれを売り渡し始めると人々は一時的な成功によってしまい，その本質的な問題には気がつかなくなってしまう。

福祉国家の希求も，隷属への一つの道なのである。
しかし，『隷属への道』は多くの人に読まれながらも，戦後社会の中で忘れられていく

- 新自由主義の時代(1979 年-)
  社会主義国家の崩壊，冷戦の終結

3. ハイエクの経済理論

貨幣の引き起こす実物経済への影響をいかに押さえるかが，ハイエクの生涯を通じたテーマである。

市場メカニズムがなぜ重要なのだろうか？なぜ政府の干渉は失敗すると考えるのか？
→ハイエクの自由主義の背後には独特の経済観がある。

ハイエクは 1920-31 年ごろまでアメリカ経済の実証分析を行っている。

第一次大戦後の潤沢な金準備に裏付けられていながら，アメリカ国内の金融制度が未完成であることの問題点を指摘
→都市部に貨幣が集中する傾向にあり，収穫期に農村部で貨幣不足が起こっている。

貨幣が実物経済の足を引っ張るという事実の観察→現実の貨幣はその制度的問題故に中立的ではない

- ハイエクは，信用創造による貨幣供給の増加によって引き起こされる景気変動を市場社会の成長にとって，不可避のコストであると考えていた。
- 一方で，政府による恣意的な貨幣供給のコントロールは，貨幣市場に対する需給を見誤る危険性が高く，不況を深刻化，長期化すると考えた。

この時点でのハイエクは金本位制の支持者である

実証分析から理論へ

ハイエクは，このような実証分析の結果，貨幣的問題が，景気変動の原因になっていると推測した。

貨幣が必要なときに必要なところに必要な量だけ供給されないことが，取引上の問題を引き起こし，それが実物経済に影響を与える。金は価値が安定しているという利点はあるが，生産量がきわめて限られている上に，他の需要の増加による準備用金の確保が難しいという問題を抱えている。

商品群本位通貨制

比較的安定した一群の商品バスケットを，本位商品として準備することによって，経済成

長に合わせた貨幣供給が可能となる。だが，市場での適切な貨幣需要を知ることはできない上に，貨幣発行主体（政府）の恣意的なコントロールを免れ得ない

貨幣発行自由化論(1976 年)

貨幣発行の主体を民間銀行に移し，複数の貨幣に競争させることによって，価値の安定と適切な貨幣供給を実現する。

一見すると，突拍子もないアイディアのように見えるが，これは銀行に日本銀行券を預け，その銀行に口座を作るという行為と大きな差はなく，形式の問題はともかく，理論的には実現不可能なものではない。

ハイエクは貨幣にかんしては，きわめて抑制的である

4. ハイエクの自由論

「自由とは[他者の]束縛がないこと」（『自由の条件』，1960 年）

→人の恣意性が働かないコントロールなら認めるということ。

→市場メカニズムだけが人々の活動を制限する。

☆ハイエクは経済的自由を政治的自由よりも重視する

→あらゆる自由の侵害は経済的自由の制限からはじまる

ハイエクの市場観

ハイエクの自由市場擁護は，「政府」vs.「民間」の構図で語れるものではなく，市場価格を攪乱する全ての要因を排除しようとした結果として提出されている。

→政府はその要因として最大のものであるため忌避され，貨幣は重要な要因だが排除できるものではないため，制度的に抑制しようと考えた。

ハイエクの市場社会の基本は，自らの知識と経済計算に基づいて，自らの利益の最大化のみを目的とする個々の経済主体である。

→個々の経済主体の自由を阻害するものは，政府であれ民間の経済主体であれ，抑制の対象となる。

ーただし，特定のグループの利益や目的のための規制ではなく，あくまであらゆる主体の経済的自由を確保するためのもの（法の支配）

5. 1970 年代に入ってハイエクは再評価される

- 福祉国家の失敗
  - 積み重なる財政赤字・貿易赤字
  - 冷戦構造下での体制間競争力の維持のための出費と軍事拡張競争

この問題はアメリカとイギリスで特に深刻な問題となった

日独の経済的成長とアメリカの相対的な地位の低下

→金-ドル兌換停止

→変動相場制へ

高負担高福祉を目指したヨーロッパ諸国は人々の労働への意欲の低下が深刻化していた。

- アメリカ経済の後退

西側資本主義国の盟主として，同盟国を守るためにおこなった様々な保護政策が，アメリカにとって限界にきていた。

  - 保護的為替レートによる貿易赤字の累積
  - 財政政策による景気の維持による赤字国債の累積

- 社会主義国家の崩壊
  - 西側諸国との軍拡競争による財政の疲弊
  - 勤労意欲の低下
  - 技術革新の遅れ
  - 自由の抑圧による創造性の低下
  - 市場システムの不在による資源配分の失敗

6. ハイエクの知識論

一般には科学的知識こそが重要な知識だと思われているが，実際にわれわれの社会を支えているのは，それぞれの人々が日常生活の中で利用している現場の知識である。それぞれの知識は採るに足らないもので，しかも一般化できない。場合によっては，明文化できない。

ex.潮の目を読む漁師の勘，ラインの異音を聞きつけて素早く対処する熟練労働者の知識

このような知識は，社会に膨大にあるため政府が経済計画を立案する場合にそれらをいちいち集めることはできない。しかし，これらにかんする情報がないと，経済を効率的に運営することはできない。

これらの知識を利用する術のない社会主義国家は原理的に運営不可能である

だが，市場経済においては，人々はそれと意識せずにこれらの知識を間接的に利用することができる

- 市場経済では人々は価格の変動のみを見ていればよい
- 市場における価格は，供給側の都合，需要家の都合を縮約して，人々の伝える情報伝達の機能を果たす。
- 人々は価格メカニズムを見て自分の経済計画を修正することによって，自分にとって最適な行動を決定することができる。

市場の効率的な機能

ナチスや社会主義の恐怖も福祉国家の破綻も基本的に経済問題から始まった

経済的自由の制限は，全ての自由の制限の始まりである。
現代社会において経済問題は最重要な問題だが，そのほとんどは市場メカニズムの中でいずれ解決できるものである。

自生的ルール
社会の中に複数の人々が互いに関わり合いながら生活してくると，やがて人々の間に（暗黙的・明示的）ルールが生まれてくる。

これらのルールは誰が定めたものでもないが，人々の行動の結果生み出されてきたものであるため，現実にマッチしたものである。人々がそのルールを必要としなくなれば自然と解消する。このようなルールの中には最初の意味が忘れ去られてしまったものがあるが，単純に排除できない。

- われわれの社会でもっとも重要なものは私的所有権の確定を前提とした市場経済である。
- われわれの社会の安定性は，自生的ルールに従って生きることである程度保証される。
- 市場社会の中で自由に人々が行動できることが，われわれの社会の発展と安定を両立させる。

考えてみよう

1. ケインズとハイエクを比較して，どちらが現実に即しているだろうか？
2. 第二次大戦後，先進国では全体主義政党が政権を獲得した例はない。これはこれからも続くだろうか？
3. 市場社会に生きるということはどういう覚悟が必要か考えてみよう。